

スイミングクラブで子どもの指導をするコーチの素養

—安全管理に対する意識調査—

尾鳥 大樹 (競技スポーツ学科 コーチングコース)

指導教員 白木 孝尚

キーワード：素養・安全管理・コーチ

1. 緒言

日本のスイミングクラブ業界は、1964年の東京オリンピック以降から1980年代の後期にかけて発展した。高度成長期を背景に、子どもの体力づくりのため、また学校の授業に水泳が取り込まれたことから、スイミングクラブに通う子どもが増加し、スイミングクラブの指導者数が増加した。一方で、クラブでの指導者教育が手薄になり、全体における指導者の安全意識が希薄化した。

1980年代の後期から、深刻な景気低迷や少子化の影響により、スイミングクラブは人件費削減のため社員の数を減らし、若く指導が未熟なアルバイトコーチを多く採用するようになった。そのため、現在のスイミングクラブは水泳の指導技術の知識が乏しいアルバイトコーチに支えられているというのが現状である。

そこで本研究は、スイミングクラブに勤める指導者に安全管理に対する意識がどの程度浸透しているかについての現状を把握することを目的とした。

2. 研究方法

子どもの水泳指導を担当しているコーチ140名(平均年齢25.64歳)を対象にアンケート調査(プロフィールと40問の五段階評価)を実施した。アンケート結果について、主成分分析を行い求められた主成分からクラスター分析を行い1~4のグループに分けた。また、より詳細な分析を行うため、子どもの水泳指導を担当しているコーチ10名(社員2名・アルバイト8名)にインタビュー調査を実施し逐語に起こした。

3. 結果及び考察

スイミングクラブで指導をするコーチの平均の勤務年数は4.65年であり、勤務年数が1年未満を『新人』、1年以上4年未満を『中堅』、4年以上を『ベテラン』とすると、『新人』が31%、『中堅』が40%、『ベテラン』が29%であった。

アンケートの結果を主成分分析した結果、第

一主成分として『指導の知識』と第二主成分として『指導者の人間性』が抽出された。また、クラスター分析を行い、抽出された二つの主成分より指導者を4つに分類すると、①指導の知識、人間性共に豊かな指導者は38%、②指導の知識は豊富だが、人間性が乏しい指導者は1%、③指導の知識は乏しいが、人間性豊かな指導者は26%、④指導の知識、人間性共に貧しい指導者は35%であった。以上の結果から、指導者の35%が指導の知識がなく、積極性や人間性が乏しかった。その理由として、今回調査したスイミングクラブの指導者の77%がアルバイトであることや、勤務年数が1年未満の指導者が31%であったことが考えられた。

インタビュー結果より、全てのコーチが安全管理を気をつけていると回答した。また、指導経験が長いコーチほど意識しなくても安全に注意することができると回答した。このことより、安全管理は指導経験からしか学ぶことができないことが示唆された。しかし、74%の指導者が『指導中に子どもが溺れた現場に遭遇したことがある』と回答した。インタビュー結果より、コーチが油断したり、自身の能力を過信している時に子どもが事故に遭遇しやすいことがわかった。このことから、指導経験の長いコーチでも油断や過信が原因で事故を起こしてしまうことが考えられた。

4. 結論

本研究の結果から、コーチの素養(指導知識、指導技術、安全管理)は、勤務年数が長くなるにつれて身につくことがわかった。しかし、現在のスイミングクラブには勤務年数が4年未満の『新人』、『中堅』のコーチが全体の71%であることから、十分に素養や安全管理が身についていないコーチが多いことが示唆された。

【引用・参考文献】

- 1) 小泉東海雄・白井光治(1981);スイミング・クラブの現状と問題点-スイミング・コーチに対する意識調査-, 日本体育学大会号, 32, 203